

町民参加の町史づくり



1993.3.31(水)

第3号



竹富町史編集室

沖縄県石垣市字大川10番地  
TEL・FAX兼用 (09808) 2-9985

## 目次

## 表紙の写真

黒島では昭和30年代から第三興進丸（船主・玉代勢太郎）と黒潮丸（船主・宮良当喜）が運航し、石垣島間を結んでいた。写真は第三興進丸で船舶の至る所に旅客があり、出航する様子を撮っている。（写真提供・玉代勢泰徳さん）

☆題字 大城正明

## 町史編集委員会の開催

### —16人に委嘱状交付—

第六回町史編集委員会及び町史編集委員委嘱状交付式が、一月三十日午後一時三十分から町史編集室会議室で開かれました。委嘱状交付は、委員の任期（二年間）満了に伴うもので、十六人の委員に友利哲雄町長から委嘱状が手渡されました。交付の後、友利町長が「町史編集室を設置して以来、町史編集に取り組んでいますが、素晴らしい町史を作り上げたい、と願います。財政的に厳しいが、今年は、町制施行四十五周年の節目に当たり、今年度は写真集、来年度は新聞集成を発刊します。飛躍するトリ年にふさわしく素晴らしいものを作り上げてほしいものです」とあいさつしました。

町史編集委員会の今回の議題は「写真

集」編集と平成五年度町史編集および事業計画。議案審議に先立ち委員長、副委員長の選任が行われ、當山哲男氏を委員長に西里喜行氏を副委員長に再任しました。

議案の写真集編集は、編集方法、タイトル、写真原稿が主な審議内容で、編集方法は①島単位の編集②使われる写真集に配慮③分かりやすい写真集に創意工夫を根本にすること。島単位の中では①村落・自然②産業・交通③教育・文化・スポーツ④暮らし・戦争⑤祭祀・芸能の五本柱を立ててることを最終的に決定しました。タイトルは写真集『ぱいぬしまじま』とし、副題に「写真にみる竹富町のあゆみ」の設定、町制施行四十五周年記念発行、とするなどを決めました。

平成五年度編集計画では「新聞集成I（明治・大正編）の発刊、戦争体験資料収集および調査の実施。事業計画は竹富、小浜での文化講座の開講、さらに史跡巡検を行うことを決定しました。

### 竹富町史編集委員

◎印は委員長  
○印は副委員長

○當山哲男	元竹富町企画課長	○西里喜行	琉球大学教育学部	○西島信昇	琉球大学理学部	○玉城功	一八重山商工高等学校	○黒島精耕	明石小学校	○山盛新本光	琉球大学農学部	○上江洲儀正	東京中央郵便局	○阿佐伊孫良	東京中央郵便局	○登野原南山	舍代	○武竹富町教育委員会	役場
○西里喜行	琉球大学教育学部	○沖縄県立博物館	○沖縄県芸術大学	○沖縄県立博物館	○琉球大学理学部	○一八重山商工高等学校	○明石小学校	○琉球新報編集局	○八重山高等学校	○琉球大学農学部	○東京中央郵便局	○舍代	○東京中央郵便局	○舍代	○舍代	○舍代	○舍代		
○西島信昇	琉球大学理学部	○琉球大学理学部	○琉球大学理学部	○琉球大学農学部	○琉球大学農学部	○琉球大学農学部	○琉球大学農学部	○琉球新報編集局	○琉球新報編集局	○琉球新報編集局	○琉球新報編集局	○舍代	○舍代	○舍代	○舍代	○舍代	○舍代		
○玉城功	一八重山商工高等学校	○一八重山商工高等学校	○一八重山商工高等学校	○琉球大学農学部	○琉球大学農学部	○琉球大学農学部	○琉球大学農学部	○琉球新報編集局	○琉球新報編集局	○琉球新報編集局	○琉球新報編集局	○舍代	○舍代	○舍代	○舍代	○舍代	○舍代		
○黒島精耕	明石小学校	○明石小学校	○明石小学校	○琉球大学農学部	○琉球大学農学部	○琉球大学農学部	○琉球大学農学部	○琉球新報編集局	○琉球新報編集局	○琉球新報編集局	○琉球新報編集局	○舍代	○舍代	○舍代	○舍代	○舍代	○舍代		

# 島じまの戦さ

## —戦時状況と住民生活—

八重山は去る太平洋戦争中、沖縄本島のように米軍の上陸、戦闘はなかつたが米英軍機による激しい空襲に見舞われ、軍命による強制疎開など筆舌につくし難いほど悲惨な状況に陥つた。食糧難にあえぎ、戦争マラリアが避難先で猖獗を極め、数多くの住民が罹患して死線をさまよう体験を強いられた。

八重山住民の戦時体験記録については『一九四五年戦争における八重山群島のマラリアについて』（八重山民政府衛生部）にはマラリア死亡者数が掲載されている。それによると竹富村（当時）は人口七千八百七十六人、罹患者三千六百五十三人、罹患率四六・三二%、死亡者七百八十五人、死亡率二一・四三%、中でも波照間は凄まじく罹患率九九・七九%、死亡率三〇・〇五%に達している。

島じまに住んでいる人々は戦時中、様々

な体験をした。それは全て戦争優先であり食糧供出、徵用など軍命があつた。軍事施設は西表島西部に船浮要塞が建設され内離島、外離島、サバ崎、祖納には高射砲隊、歩兵隊、重砲兵連隊、陸軍病院が設置された。また水上特攻艇基地も設けられた。小浜島には旅井隊、引野隊が配置され、波照間島に山下虎雄軍曹（本名・酒井清）、黒島には山川軍曹（本名・河島登）の離島残置工作員が派遣された。中でも山下軍曹は、住民を威圧した。村役場は一時、小浜島に置かれ行政事務が執られた。

八重山住民の戦時体験記録については『沖縄県史10 沖縄戦記録2』に記されている。その中で竹富町関係者は六十三人が証言している。証言内容は生々しく戦争の一端を垣間見ることができる。そこには小浜島からの平得飛行場建設の微用、皇國大日本少年隊、島民を追い出して牛を強奪した軍の横暴ぶり、イヌマキの強要、炭坑生活、避難命令との鬭い、10・12空襲の体験などが赤裸々な言葉で綴られている。戦争マラリアに関しては、

山下軍曹の「抜刀して死地マラリアの島への疎開」と項目を配し三十二人が西表島の南風見田への強制疎開とマラリア地獄を語っている。

## —戦争体験記録を残す—

太平洋戦争が終結して四十八年目を迎えます。時の流れの中で戦争体験者の高齢化が進み今、時代を浮き彫りにし戦争の実相を明確に把握する視点から体験者の証言を記録として止め置く必要があります。戦争体験者の証言を記録保存することは歴史の掘り起こしでもあり、竹富町史にとって重要なことです。戦後世代が増え、戦争体験の風化が懸念されているが、戦争を直視し恒久平和を願う立場から、戦争体験記録を速やかに集成し、正しく記録し戦史の証として後世に伝えいくことは極めて大切であります。戦争を歴史の一頁として記録することは意義のあることです。

# 戦時・戦後体験記録の募集要綱

## 戦災実態調査

### 一、募集対象者

イ、戦前の竹富村民及び現在の竹富

町民。

ロ、竹富町民で戦争を体験されたこ

とのある方。

ハ、沖縄県内及び本土在住の竹富町

出身者。

二、戦後復興で（生活等）竹富町内

で体験された方。

ホ、当時、竹富町に駐屯していた軍

隊等。

### 二、記録の対象期間

一九三一年（昭和六年）年満州事

変（一九七二年（昭和四七年）五月

一五日年本土復帰まで。

### 三、原稿の枚数

四百字詰め原稿用紙の五枚（二〇

枚程度

### 四、原稿の締切

平成五年十一月末日までとする。

五、収録決定は、竹富町史編集委員会

が行います。

六、収録の場合添削があります。

す。

七、収録された方には、編集取材協力

記念タオルを進呈します。

八、提出した原稿は、返却いたします。

九、原稿には、住所、氏名、現在の年  
齢、昭和一九年当時の年齢生年月日、  
職業もお書きの上、下記竹富町史編

集室あてにお送り下さい。

十、聞き書きをしてもらいたい方も下  
記へご連絡下さい。  
連絡先：

二九〇七

沖縄県石垣市字大川一〇番地

竹富町役場（町史編集室）

☎ ○九八〇八一一九九八五

戦時体験を具体的に書き止め、記録化することと同様に、戦争による家族の死亡者数、軍人および軍属の体験、家屋や農作物の被害状況など、戦災の実態を把握することは、戦争の実相を浮き彫りにするためにも大切なことです。“戦時体験”と“戦災”を明確に捉えることで“戦争”がどのようなものだったのか、ということを明らかにできると考えます。戦災実態調査は竹富町史第十二巻・資料編「戦争体験記録」の編集に供するもので、調査対象者（世帯）は①戦前、戦中に竹富町に住んでいた人（世帯）②現在、居住している町民で戦争体験された人③沖縄県内および本土在住の竹富町出身者で戦争体験された人、となってます。調査対象期間は、一九四一年（昭和十六年）～一九四五五年（同二十年）までに設定します。調査は、調査票に調査者が聞き取りして記入するか、本人書き込む方法をとり、平成五年度から作業開始します。

## 戦時アルバム

### 下永部隊

舟浮要塞は一九四一年（昭和十六年）に建設された。下永憲次・陸軍大佐を司令官に内離島、外離島、サバ崎、祖納に軍事施設を設置した。（写真提供・井上文吉氏）。



### 舟浮国防婦人会

「国坊は、まず家庭から」を合言葉に大日本国防婦人会が戦時中、各地区にくられた。カッポウ着とタスキ掛けが当時の婦人のスタイル。“銃後の護り”を肝に命じて戦地の軍隊を支える。竹富町も同様だった。（写真提供・井上文吉氏）。



### 水上特攻艇基地

水上特攻艇は合板で造られ、軽量で長さ五メートル～六メートル。艇首に百キロの爆雷を装備し、高速で突進し敵艦に体当たりした。それは“人間魚雷”的だった。写真は発進基地である。（写真提供・井上文吉氏）。



## 祖納国防婦人会

国防婦人会の組織は、全国の津々浦々まで及んだ。舟浮と同様、祖納にも「銃後の護り」として国防婦人会がつくられ戦場の軍隊を支えた。画一化されたスタイルに戦時の恐怖感がある。（写真提供・宮良長吉氏）。



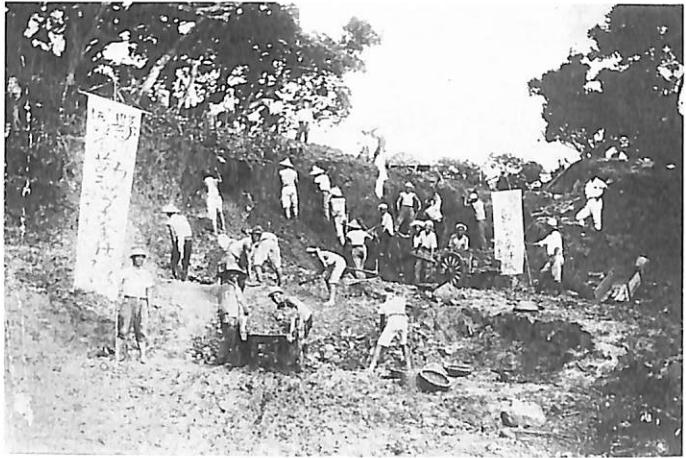
## 牛馬耕訓練生

農耕馬と鋤を手にした若者たち。畑地をすき起こして一日の訓練が終わつた光景であろう。背筋を伸ばし、引き締まつた表情はりりしい。服装に歴史を感じさせる。（写真提供・仲盛秀雄氏）



県道を開削する勤労奉仕隊。戦時中は地域ぐるみで道路作業等に動員された。写真是西表島の様子を撮ったものである。幟を掲げて道路整地に取り組む住民の姿。場所は祖納であろうか。（写真提供・宮良長吉氏）。

## 勤労奉仕隊



## 『戦跡をたずねて』

### —内離島の砲台—

西表島西部の祖納半島からサバ崎一帯に船浮要塞が設置されたのが一九四一年（昭和十六年）のこと。日本軍が沖縄に

九三七年）で中国との全面戦争に突入。戦時体制が一段と強化された。日中戦争の拡大は、米英の利権侵略に結びつき、東南アジアの資源獲得を目指したインドシナ進攻は米英との対立を激化させた。そして一九四一年には真珠湾攻撃で太平洋戦争へ。日本は軍事優先の社会となつた。八重山にも軍国主義の嵐が吹き荒れた。

船浮地区には天然の良港があり、戦時中は海軍の要港として使用された。船浮要塞は陸軍の軍事施設として建設された。要塞は日米開戦により南方諸島防衛の中継地点としての機能を果した。建設は西表炭坑夫、朝鮮人軍夫が駆り出され進められた。中でも内離島、外離島の砲台建設は困難を極



（写真提供・三木健氏）

（写真提供・三木健氏）  
船浮要塞は一区・内離島、二区・祖納三区・外離島、四区・サバ崎と地域区分された。要塞の主な任務は、艦船の待避停泊等を守備することにあつた。船浮要塞については当時、重砲兵聯第一中隊の隊長だった鉄田義司・少佐の手記が詳細に記している。これによると同要塞は中城湾要塞と同時に下令され、二カ月間で建てられた。

要塞配備部隊は一九四一年当時、司令部は内離島にあり、司令官は下永憲次陸軍大佐が務めた。その中に高射砲隊、歩兵隊、陸軍病院が設けられた。重砲兵聯隊は内離島に聯隊長の山崎豊吉・陸軍少佐がおり、外離島に斯加式十二インチ速連射加農二門、サバ崎には三八式野砲二門、祖納には三八式野砲四門、探照燈一基があつた。

一九四四年（同十九年）になると米英の空襲も始まり、住民は避難生活を余儀なくされた。要塞はその後、戦争の推移に伴い重砲聯隊の一部を残して各隊は一九四四年九月八日、石垣島に配置された独立混成第四五旅団（旅團長・宮崎武之少将）に編入された。

（通事孝作）

軍事施設を設けた中で最も早い。日本は当時、柳条溝事件（一九三一年）により満州侵略に入り、さらに蘆溝橋事件（一

された。要塞の主な任務は、艦船の待避停泊等を守備することにあつた。船浮要塞については当時、重砲兵聯第一中隊の隊長だった鉄田義司・少佐の手記が詳細に記している。これによると同要塞は中城湾要塞と同時に下令され、二カ月間で建てられた。

## 《写真にみるわが町》

### —由布島の民家—

西表島の東海岸に浮かぶ由布島は現在、水牛車が往来する島として知られる。島は亜熱帯植物園が設けられ、数多くの観光客が訪れる。しかし一九七一年（昭和四六年）八月までは、豊かなムラ社会が脈打っていた。

島は、南北に細長いひょうたん型をし隣の西表島とは砂地でつながっている。干潮時には歩いて渡ることができる。

島は人頭税時代には、与那良川一帯の水田に通耕する竹富島、黒島の人々の泊まり地だった、といわれる。マラリア禍は、西表島で猛威を振るつたが、島にはマラリア感染の蚊がおらず、戦時中に避難した人々は、マラリアの難を逃れた。

島に人々が住み始めたのは一九四八年（昭和二三年）で、太平洋戦争からの引揚者を中心に集落ができた。集落ができると学校も創建され、生活環境の整備も進んだ。住民の“足”である船は、春風丸が定期船として石垣島間を結んだ。電話は一九六七年（同四二年）に開通し、住民の生活も便利になつた。

写真は、閑静なたたずまいを見せる集落の様子である。民家は、ほとんどカヤぶきで、住民は西表島で農業を営んだ。しかし一九六九年（同四四年）、台風エルシーにより全世帯が床上浸水に遭い、人々は一九七一年（同四六年）、新天地を求めて美原に移住。集落は二三年間の歴史に終止符を打つた。

（通事孝作）



## 《文化財探訪》

### —船浦スラ所跡—



く残っていない。現在では港湾の一部に組込まれている。

造船所は、琉球王府時代にはスラ所と呼ばれていた。語源については「木の梢」説、「修羅」説などがある。西表島には古見と船浦二カ所に造船所があつたことがわかり、古見から船浦へと移転している。

船浦スラ所は『八重山島年來記』に「船浦ニすら所始ル」と記され『參遺狀』にも造船に関する文章がある。両資料によると船浦には一七四八年（乾隆十三年）にスラ所が設けられたことが呼び上がつてくる。

近世八重山の造船に関しては『八重山島年來記』の一六二八年（崇禎元年）の条に船造りの記事が見られ以後、遂次に書かれている。さらに家譜にも上納船に関する記事がある。当時の船は、艤用い手漕ぎだった。しかしそれ以後、艤こぎとなりやぐらも建ち、一六七七年頃には大型化した。西表島のスラ所は一七〇二年、古見のかきら崎に設けられ、その頃の船は帆船で大型だった。

船浦スラ所は、八重山の在番、頭たちが琉球王府に古見から移転したい、申請したことと端を発する。それは場所的な問題と満潮時でも、かなり掘り込まないと船が浮ばず、船を引き出すのに多くの人夫を必要としたことによる。これが船浦になると、これらの問題は解消され、さらに諸村から船材を搬入するのに好都合だつた。

船浦スラ所跡は船浦港物揚場及び港湾施設用地工事に際し、一九八九年九月十八日（十月二十日にわたり）県教育庁文化課による緊急発掘調査が実施された。調査の結果、鍛冶用の炉、鍛造剝片の集中箇所などの遺構、縦斧、刀、包丁、船釘、楔、ボルト、さらに炭鉱の廃棄レールなどの遺物が出土。また外耳土器、八重山焼の壺類、中国産褐釉陶器、灰釉碗なども検出された。遺構及び遺物を総合的に判断して船浦スラ所は、一八八九年（明治二二年）頃まで、約百四十年間にわたり使用されていることが明らかになった。

（通事孝作）

# 高那家板文書

## 徳傳家

子三月 宮良親雲上 石垣親雲上 大浜  
親雲上 古堅筑登之親雲上 長浜  
筑登之親雲上 新城親雲上

所藏者 高那石吉

翻刻 玻名城泰雄

雄

米式斗五升起 覚

材質 センダン ヨコ二九寸

右者幼少之此母を失父ニ者老躰ニ而家内極窮相成至而為及難儀事候處耕作方雇夜相効漸々有附年貢上納物無不足相弁父

竹富村 たら

仲吉親雲上

竹富村 役人



(表)

丈夫相素立屋敷囲石垣結構ニ築立且村中取合陸敷役人方下知方厚汲合之夫ホ申付候節少茂無油断相効旁所中感心仕一統之見勤ニ茂相成居段親廻之砌村頭并役人筆者申出之趣有之殊勝之儀ニ而為褒美本行之員數相与へ候間先様猶以孝養方始ヲ家業等入念相効候様可申達候此旨申渡候以

### 〈解説〉

竹富村に住む高那たちは、母親を失い父親が老齢で家庭は苦しいながらも農耕に励み、貢祖は不足なく確実に収める。

さらに親孝行で、屋敷を石垣囲いにして立派に築き上げる。その上、村人とも仲睦しく村の手本である、とし琉球王府から表彰されたことを示す文書である。元来、掛軸だったが大正七、八年頃、字型そのまま平板に彫り込まれた。内容を見ると褒美として米二斗五升を与えられたことが分かる。覚書の末尾には、八重山三間切の頭、在番等の名を連ねる。これから判断して表彰は一八七六年（光緒二年）と思われる。（通事孝作）



## 《聖地めぐり》

### —保里御嶽—



と関わりを持つ。事実、御嶽は海岸線の近くに点在する。『琉球国由来記・卷二十一』には八嶽が「公事御嶽」として記されている。

『琉球国由来記』には「八重山島嶽々名並同由来」として七十六嶽が、その成り立ち等を綴っている。今回、紹介する

保里御嶽は、神名が「イヘノ白玉祭真門」御イベ名は「モモケヲタヘ」とある。由来は記されていない。しかし島には由来が、伝承として語り継がれている。御嶽は当然、海神と深く関係し航海安全を祈る「旅御嶽」として創建され、崇拜されている。喜舎場永洵著『八重山民俗誌』に御嶽の由来について書かれている。

往時、大和國から大和人が遙々と長途の航海を続けて、黒島の東崎（ヌナシキ）と称する海岸へ安着した。一行は喜んで上陸する時に船の帆柱に奇しき蛇がからみ付けて居るのを見た船員が騒ぎ立ったのである。：

果たせるかな、靈蛇だとみえて保里村の「イミスク浜」の所へ来ると、蛇はいきいきと元気よく自ら陸上へ向けはい出したのである。一同は、此所が此の靈蛇の住む場所であると安心して大しゃこ貝を家として其の上を被つて村へ入ったのである。

『八重山民俗誌』はさらに、大和人と蛇の関係について神の化身が蛇になったのだろう、と書き大和人は島で妻帯した後、郷里へ帰る、と記す。この時、妻は夫の一路平安をこめて祈願したところ念願が成就し無事、帰郷したと書き連ねる。妻が祈った場所は、神に通じた靈地である所から村で協議し、御嶽を創建した、つまり信仰場所が保里御嶽なのである。

御嶽の由来は、伝説の城を越えないが「おなり神信仰」と関係があるのでなかろうか、と唱える人もいる。神司は前底ハルさん（78）で昭和三十一年から務めている。豊年祭、結願祭など年中祭祀では御嶽で神に手を合わせる。

（通事孝作）

八重山の御嶽は、島々により呼び名が異なる。黒島では「ワン」と言う。島の御嶽を概観すると、由来はほとんど「海」

（中略）：一同は協議の結果、此の島を巡回して此の靈蛇の氣の向く所を探し出そう、と島をぐるぐる巡つたのである。

## 『新聞で知る町の今昔』

町立黒島小中学校は現在、島のほぼ中央の仲原地区に設置されているが、現在地に学校が設けられるには、大論争が沸き上がるなど糾余曲折があった。同校の沿革誌によると学校は一八九三年（明治二六年）六月十二日、大川尋常高等小学（三九年）五月十四日には黒島尋常小学校として独立し、子弟の教育に務めた。

学校は創立当初、宮里地区にあつたが東筋、伊古、保里の父母から学校が遠く登校に不便、との声が起り県、村当局も学校敷地移転に向けて校舎新築の予算を計上し、準備を進めてきた。しかし宮里、仲本の父母から反対論が噴出し、集落間で激しく対立した。当時の「先嶋新聞」「八重山新報」は学校敷地移転問題を大々的に取り上げている。中でも「先

（八重山新報）（大正十年四月十一日  
付）は「黒島尋常小学校の新築は已に予  
算も通過し、いよいよ最近着手する運び  
になつてゐるが、例の敷地問題で四ヶ字  
の住民が我田引水の争いをなし、当局を  
手こすらせてゐる」と事実を柔らかく報  
道。しかし「先鳴新聞」は三回に分け、  
二百五六六行にわたり「現在地論」を非難、  
仲原地区に移すべき、との論陣を張つて  
いる。

〔先島新聞〕によると、『現在地論』の主張は①茶色水の沸き出る②旧間切番所跡、の二点が主だが、島の中央だと民家がなく台風時に危険、との見解も示している。『中央移転論』は③通学に各集落から近道④往復の時間を徒費しない⑤兩天時の雨具の損失が少ない⑥日射病の憂いがない、と提唱している。併せて『現在地論』を論破すると同時に集落別人口、県税、村税納付額も示している。

学校敷地移転問題は、最終的に“中央移転論”が過半数を上め、実現された。校舎落成式は一九二二年（大正十年）七月十日に行われている。（通事孝作）

県地域史協議会研修会

—南風原町で開く—

沖縄県地域史協議会（恩河尚代表）の  
九九二年度第三回研修会が、昨年十二

月二七日午前十時から西原町にある西原共同福祉施設で開かれた。今回の研修テーマは「地域史における移民編の特徴と課題」。報告は波平常則さん（西原町史）嘉陽妙子さん（具志川市史）、山川輝昌さん（北中城村史）、宮里健一郎さん（名護市史）、泉川良彦さん（読谷村史）の六人が行つた。

報告は、最初に波平さんが移民編集集の目的、南米、ハワイ、ロサンゼルス、

外務省外交史料館での調査をポイントに話した。その中で移民編を町史編集に組

現在は一世が少なく、二、三世が活躍し

外調査では一現地の市町村関係者の協力は不可欠であり、事前に連絡を取り進めることと」強調した。

嘉陽さんは「具志川市史」第四巻移民。

出稼ぎ編を平成八年度に発刊予定、とした上で調査方法は①直接聞き取り②関係資料の収集③写真撮影④現地踏査などを挙げた。調査地はハワイ、ブラジル、サ

山川さんは、移民編集の取り組みについて「聞き取り調査」を重視し、資料は科学的に分析する、と強調。聞き取り調査に関して調査内容の学際化、総合化、調査員の熟練強化を挙げた。課題については移民地の言語での翻訳発刊を指摘し  
た。

名護市史の宮里さんは、ハワイ移民調査を中心に話した。移民調査の目的に關して①海外移民が多い②移民記録は、近代の名護市史の人々の重要な歴史と経験③移民一世の高齢化一を挙げ、移民調査の重要性を説いた。その中で移民した人々の大半が帰化していない現状を説明。その理由として生活に支障をきたさない、ことを述べた。

泉川さんは、移民調査の目的について「なぜ移民・出稼ぎが行われたのかを考え、併せて読谷の産業を紹介し、當時

イパン・テニアン島での移民調査とし今後、ペルー、アルゼンチン、ボリビア等の調査、八重山移住の調査にも取り組む、



館での史料収集を挙げた。

## 《歴史の証言》

（概要）

### —吉田原部落を語る—

語り手 大城清三（69）

西表一四九九（白浜）

聞き手 通事孝作



西表島西部の白浜と舟浮の間に、古くは吉田原部落があり住民は多い時に五、六十人ほど住んでいた。部落は通称・木炭村と呼ばれ住民は炭坑に関わり、木炭を焼いていたことから、その名がついた。部落はいつ創建されたか不明だが、昭和二十年代中期には消滅した。白浜に住む部落びとの一人・大城清三さんを訪ねた。

—白浜と舟浮の間に吉田原がありましたが、そこは砂浜の帶が延び周囲は山岳が迫っています。戦後まで集落があったと聞いていますが、いつ頃、創建されたのでしょうか。

大城 私は内離島の成屋で大正十三年三月十八日に生まれました。育ったのは吉田原です。物心ついた頃には六、七軒ほど民家があつたことは覚えていますが、さていつ頃、部落ができたのか

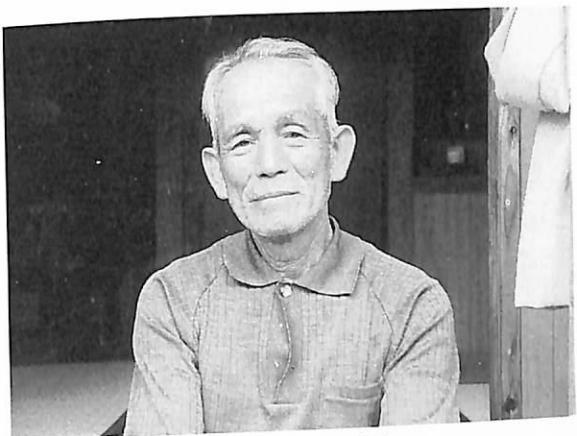
は分かりません。

—吉田原の住民は、そこで何をしていましたのでしょうか。

大城 白浜から舟浮にかけては戦前まで炭坑がありました。住民は、各炭坑に坑木を切り出して、船で運んでいました。父親はもちろんのこと、住民は炭坑を頼りに仕事をしていました。

—住民は何人ほどいたのでしょうか。

大城 私が十四、五歳頃は民家は三十戸くらいで、昭和十四、五年頃に、新しい炭坑が出来たが、そこで三十七、八戸に増えた。人口は五、六十人以上いたでしょう。炭坑が出来ない前は木炭



大城 清三さん

た。人々は山と深く関わっていたことから山の神社を造りだした。それは今まであります。それは山の神を祀るものでコンクリートではなく、石をくり開けてそこに神体を安置しました。神体は人形のようだったが、どのような形をしていったのか覚えていません。

—集落では坑木の切り出しと合わせて木炭を焼いていたことが分かりましたが、木炭の焼き始めはいつ頃からでしょうか。

大城 部落には田んぼがあつたが、田ん

ぼの畦道を通って木炭用の木をかつぎ歩いたことを覚えています。それは七、

八歳の頃だったと思います。坑木の切り出しの仕事をしながら何人かは木炭を焼きました。父親もそうだった。田

んぼがあつたのですが。

大城 ありました。部落では田んぼも烟も作りました。それは雑農のようなもので、半農半林が部落の産業の様子でした。

—集落の住民は多い時に五、六十人いた、とのことですが、当然、子どもたちもいたでしょう。学校はどうしましたか。

大城 学校へ通うには、舟浮と白浜に行かなければならず身寄りのある人はそこで、下宿しました。中には祖納に通

で運び出したのは分かるが、それがどこへ販売したのかは分かりません。

—昨年、村跡に行つたのですが、そこに船着場跡らしきものがありました。が…。

大城 船着場は当時、新たに造ったものはなかつた。確か桟橋はありました。

それは石炭の積み出し、運搬に使われたものだつた。海岸に延びた桟橋は長さ三〇㍍~四〇㍍ほどだつたでしよう。

—海岸から山岳の方へ向かう途中、

水田跡らしきものがありましたが、田んぼの畦道から海浜に入り、家まで運

し、そして送つて住民は生活していました。炭坑との関わりが深かったのですね。

—集落は元来、炭坑の坑木を切り出

し、そして送つて住民は生活していました。

大城 部落の人々は、山の木を切り出しそれを各炭坑に送つていた。私が十歳頃には木炭用の木も切り出しが盛んだつ

大城 部落には田んぼがあつたが、田んぼの畦道を通って木炭用の木をかつぎ歩いたことを覚えています。それは七、八歳の頃だったと思ひます。坑木の切り出しの仕事をしながら何人かは木炭を焼きました。父親もそうだった。田んぼがあつたのですが。

—木炭は焼いて、どこへ出荷したの

んだ記憶があります。

大城 それははつきりと覚えていません。當時、南海炭坑や星岡炭坑がダンベエを持っており、それに木炭を積み込ん

繁栄し連絡船も多いので下宿先を白浜に変えました。

出身地はどこでどうか。

**大城** 沖縄本島の糸満市座波です。親父が木炭で金儲けしよう、と西表島に移住したのが始まりで、私は先程、言つたように成屋で生まれました。

一集落がなくなったのは…。

砂浜の帶が延びる吉田部落跡



**大城** 舟浮と木炭村は、戦時中、日本軍から立ち退き命令が出て強制疎開させられました。家屋、農作物はそのままにして強制的に退去させられました。

舟浮は大原でしたが、木炭村は仲良川上流でした。中には白浜に移住する人もいました。当時、食糧の確保が難しく夜になると、こっそり部落に行き農作物を取つてきましたが、中には日本軍に見つかり、ムチ打ちにあつた人もいます。舟浮は軍港で要塞があり、軍事上、住民は邪魔であるため強制疎開させたのでしょうか。立ち退きは昭和十八年後半から十九年初め頃だと思います。戦後住民は、分散してしまいました。マラリアで死んだ人も多いのです。

学する子もいました。子どもたちは、全て親元を離れて下宿生活をしました。私は一、二年ほどは舟浮でした。その後、白浜に移りました。白浜は石炭で

部落は自然になくなつたのではあります。日本軍に追い出され、強制的に移住させられたことにより、なくなつたのです。今では部落に住んでいた人々は、ばらばらに散り、今だれがどこに住んでいるのか分かりません。

一集落の建物は、その後、どうなつたのでしょうか。

**大城** 部落は戦時中になくなつたが、私は戦後、部落に戻りました。戻つてみると柱だけが残り、人の住める状態ではありませんでした。畑、田んぼも荒れ果てていました。私は戦争中、軍属として島を離れましたが、戦後、復員し部落に帰りました。戻つて来ると父親はマラリアで亡くなつていません。

復員した後の生活は大変でした。何しろ食糧がありません。家屋は残つた壁を利用して何とか建て直した。結局四五五年ほど部落に住んでいたが、昭和二十五年頃には白浜に移りました。その後、何人かはまだ部落にいました。しかし食糧がないため、一年しないうちに他所へ移住したと思ひます。生活

木炭村とつけられたことも分かりました。

一 脱落について、さらに教えて下さい。

大城 木炭村については、だれが付けた

のか分かりません。それは周囲の人々が付けたのでしょう。部落に住んでいる人々は、木炭村とは言いませんでした。

吉田原部落と呼んでいました。部落については書類がありました。確かに

会則のようなものもありました。しかし今はりません。親父は部落会長を

やつていて様々な書類が入った木箱を持っていました。それが後に部落がなくなり書類も必要ない、ということを見捨てられ、どこに行つたか分かりません。今、考えると記録は残して置く必要があった、と思います。部落の印鑑もありました。「吉田原部落之印」

という大きな角印でした。書類や印鑑を残しておけば、部落を知る立派な証拠になりました。

一 父親の名前は何と言いますか。

米一合もありません。何しろ大変な生活でした。

一 木炭村の正しい名称は吉田原部落

と窺いました。木炭を焼いていたので



山岳と海岸の間の水田跡

大城 大城清昌と言い、五十歳後半に亡くなりました。私が復員して来るまでに死亡しており位牌がありました。

## 《文化短信》

◎：竹富島の一周線道路建設に伴い県教育厅文化課によるカイジ浜貝塚の緊急発掘調査が、昨年九月七日から十一月九日にわたり実施されました。同貝塚は、蔵元跡近くにあり調査の結果、八重山で唯一の複合遺跡であることが判明しました。複合遺跡とは、時代の異なる遺跡が重なり合っている埋蔵文化財を指し、カイジ浜貝塚の場合、十世紀以前から明治時代以降の遺物包含層が層序を形成しています。緊急発掘調査は、二ヵ年継続で道路部分に限定して行われました。遺物包含層を見ると最下層の第四層が十世紀以前、第三層は十二世紀～十三世紀、第二層が十四世紀～十五世紀、第一層が明治以降となっています。遺構は、無土器時代の柱穴、さらに炉跡、遺物は石斧、ストーンボイル、鏃、フイゴ羽口、船釘、中国製白磁などが検出されています。その中で無土器時代の住居跡は、波照間島の大泊浜貝塚に次ぐものです。県文化課

では無土器時代から蔵元の設置時まで周辺に村落があつたものと推測しています。

## 《知名あれこれ》

◎：本町史編集委員を務める三木健

氏著の『沖縄・脱和の時代』が、このほど発行されました。三木氏は、これまで『八重山近代民衆史』『西表炭坑概史』『オキネシア文化論』など、多数の著書を発表してきましたが、本書は復帰二十周年を節目に今後の沖縄の歩むべき道を説いてくれます。内容は三部、十二編から成り、沖縄を把える巨視的な観点とともに地方の視点も導入しています。

◎：竹富島の祭祀・種子取祭と住民の生活を写し出した写真集『うつぐみの心－竹富島－』が発刊されました。同誌は一九七三年に初訪問以来、竹富島にこだわり続ける写真家の・大塚勝久さんがまとめたものです。写真は前編モノクロで祭りの神秘性と人々の暮らしを的確に捉えています。数量は三百七十三点に及びます。写真には共同体の心が脈打っています。

地名は何に由来しているのだろうか。伝説の世界だが、明和の大津波（一七七年）以前、島の東部にブシシヌハコと呼ばれる屋敷があり、そこに両親と息子が住んでいた。しかし息子は、親の言うことを聞かず、勝手に暮らしていた。

そのような時、島に大津波が押し寄せた。息子は、注意に従わず津波に追われサコサバリで咳込み、死んでしまった。島では咳のことを“サコ”という。サコサバリとは咳で死んだ場所、といわれる。

### —サコサバリ—

## 収蔵図書紹介

受贈図書紹介  
多数の個人、関係機関等から寄贈を受けております。あわせてお礼申し上げます。

寄贈者御芳名	受贈図書名
本原實	七十は鼻たれ小僧
阿佐伊孫良健	牛歩の如く
三木	南島流転
本原盛	ある離島教師の軌跡—石島英文伝—
本光	西表炭坑史料集成
孝直	原郷の島々
西表島を中心とした資源植物賦存状況	
熱帯地域の森林資源回復に関する研究	
開拓三十年史	
開拓四十年史記念誌	
小浜公民館 創立三十周年記念誌	
創立四十周年 体育館竣工記念誌	
平成三年度 研究紀要（最終年次）	
浦内川架橋・白浜港築港竣工記念誌	

## 北谷町役場

北谷町民の戦時体験記録集・第一集  
沖縄軍事関係事典(1)・(2)

北谷町史 第二巻 資料編

多良間村役場	沖縄県教育委員会
石垣市役所	多良間村の民話
石垣市教育委員会	沖縄の組踊
石垣市福祉事務所	市勢年表・いしがき
南風原町教育委員会	市民の戦時・戦後体験記録一~四
斜里町（北海道）	いしがきの地名(1)石垣市史研究資料
南風原町教育委員会	こどもの遊び—市史研究資料
福祉の概要	
南風原町沖縄戦災調査4	
氷点	
われら緑の大地に生きる	
はくちようクルル	
知床で夢を	

沖縄県立博物館	県立博物館総合調査報告書IV 伊計島
"	V 濱底島
"	VI 与那国
沖縄県立博物館紀要 第7号・9号	
"	第11号～14号
美術工芸の美を求めて	
県立博物館 収蔵品目録	

沖縄県立図書館 歴代宝案研究・創刊号

浦添市立図書館 紀要1

名護市教育委員会 名護市の人小字

名護市役所 大先輩名簿 第三版

羽地・屋我地地域資料目録1

南風原町教育委員会 南風原町沖縄戦災調査4

コザ市役所 コザ市史

宜野座村役場 宜野座米軍野戦病院集団埋葬地収

渡嘉敷村骨報告書

渡嘉敷村役場 渡嘉敷村史 資料編

北中城村教育委員会 北中城村の文化財

宜野湾市役所 宜野湾市史 第七卷 資料編六

沖縄県警察本部 沖縄県警察史 第一卷 明治・大正編

東京八重山郷友会 八重山郷友会創立五十周年記念誌

六十周年記念誌

東京沖縄県人会 東京沖縄県人会三十周年記念誌

第十一官区海上保安部 十年のあゆみ

沖縄県立芸術大学 沖縄芸術の科学

東海大學 海洋観測データ 第六・七号

琉球大学・農学部 第四次熱帯農学研究施設運営計画書

沖縄総合交通体系基本計画

山城善三 八重山開発資料

八重山植物の研究

八重山群島植物誌

西表島農業調査報告

西表島第二次農業調査・中間報告

西表島の資源及び経済の潜在力に関する

調査

八重山文化 創刊号～第八号

琉球の歴史

琉球の研究

沖縄県の歴史

敗戦と沖縄

太平洋戦記・沖縄の最後

沖縄かくて潰滅す

日米最後の戦闘

沖縄戦報道記録

死生の門

ひめゆりの塔

死生の門

沖縄民芸の記録

私の半生

沖縄の闘牛

たらま島

佐	白	比	岸	大	河	氏	原	太	仲	本	編
野	井	嘉	本	城	名	家	田	田	程	田	著者名
芳	祥	ヨシ	高	逸	俊		伴	良	正	安	
康	平	平	子	男	朗	宏	彦	博	吉	次	
日本の海中公園	沖縄の衛生害虫	琉球孤の海底	琉球列島の地形	失われた生物・沖縄の化石	沖縄の支配	八重山文化研究会	沖縄風土記	沖縄風土記	統・沖縄の文化財	南島採訪記	図書名

購入図書紹介  
多数の書籍を購入していま  
すが紙面の都合上その一部を  
紹介します。

風	土	記	社	新	星	旺	月	新	明	全	發行所名
"	"	"	"	星	圖	刊	刊	星	全	堂	書店
"	"	"	"	書	書	沖	沖	圖	堂	書	書店
"	"	"	"	出版	社	繩	繩	書	書	社	社

谷	川	健	一	沖	石	比	伊	司	木	奈	前
川	健	一	社	繩	川	嘉	藤	馬	崎	良	花
健	一	社	ス	タ	真	康	達	遠	甲	本	哲
一	社	ス	C.OUWEHAND	生	雄	幹	俊	太	子	辰	也

日本の神々—神社と聖地	日本の神々—神社と聖地	沖縄タイムス社	大琉球写真帖編集委員会	HATERUMA	琉球の宗教人類学						
南島文学発生論	写真記録—沖縄の戦後史	大琉球写真帖編集委員会	大琉球写真帖編集委員会	大琉球写真帖編集委員会	琉球の古層(西表島)						
日本の海中公園	琉球孤の海底	琉球の地形	琉球の地形	琉球の地形	琉球の地形	琉球の地形	琉球の地形	琉球の地形	琉球の地形	琉球の地形	琉球の地形
沖縄の衛生害虫	琉球の生物	琉球の生物	琉球の生物	琉球の生物	琉球の生物	琉球の生物	琉球の生物	琉球の生物	琉球の生物	琉球の生物	琉球の生物

白	思	沖	委	I	ニ	弘	那	築	海	新	平
水	潮	潮	員	S	ラ	日	霸	風	邦	星	凡
社	社	社	会	B	文	新	出	土	出	書	社
社	社	社	会	N	社	聞	版	一	版	刊	社



## 業務日誌

八月一日

第五回竹富町史編集委員会開催。議題(1)戦争体験記録編集について(2)新聞集成編集について(3)写真集「写真にみる竹富町のあゆみ」編集について。

八月二二日

先島歴史シンポジウム及び文化交流会議（職員二名参加・三日・於宮古平良市）。

九月二日

定例町史編集室内会議。九月業務予定検討。

九月七日

第二回国立国会図書館寄贈図書の選書（職員二名・於沖縄県立図書館）約八百冊受領。

九月一一日

写真撮影及び資料収集（職員一名・小浜島日帰り）。

九月一三日

新城島結願祭。写真撮影及び資料収集（職員一名・一四日）。

九月二九日

蒐集館所蔵農機具等の写真撮影及び資料収集（職員一名・竹富島日帰り）。

十月二日

定例町史編集室内会議。一〇月業務予定検討。

十月三日

写真撮影及び資料収集（職員一名・小浜島日帰り）。

十月九日

黒島ビジターセンター展示物、生活用具、民具等の写真撮影。

八月一日

西表西部・木炭村（通称）跡写真撮影及び資料収集（職員一名・二日）。

八月八日

祖納、星立豊年祭。写真撮影及び資料収集（職員一名・二日）。

七月二十七日

沖縄県地域史協議会研修会（職員二名参加・一八日・於南風原町）。

七月一六日

書籍購入。竹富町・与那国町の遺跡外四冊蔵書。

七月一〇日

定例町史編集室内会議。七月業務予定検討。

七月三日

定例町史編集室内会議。七月業務予定検討。

七月二〇日

古写真収集及び複写撮影〔各家庭訪問〕（職員二名・小浜島（二八日））。

六月二六日

編集室内臨時会議。写真集及び町史だより第二号発刊検討。

六月一九日

町史編集資料収集・聞き取り調査。（職員一名・大原日帰り）。

■一九九二（平成四）年

六月一八日

町史編集資料収集・聞き取り調査。（職員一名・大原日帰り）。

（職員一名・黒島日帰り）。

十月二三日

ミヨークチエ（神行事）の写真撮影及び資料収集（職員一名・波照間島日帰り）。

十月二十四日

鳩間島結願祭。写真撮影及び資料収集（職員一名・日帰り）。

十一月二日

新聞資料「沖縄毎日新聞」影印複製本（明治四二年～大正元年一二月）蔵書。

十一月四日

定例町史編集室内会議。十一月業務予定検討。

十一月二十四日

竹富町史だより第二号、町全戸へ配布。

十一月二九日

沖縄県地域史協議会研修会「地域史における移民編の特徴と課題」講演「移民について」（職員二名参加・）二八日・於西原町）。

十二月二日

定例町史編集室内会議。一二月業務予定検討。

十二月四日

第二回写真集編集委員会開催。議題・収録写真の選択及びレイアウトの検討。

■一九九七(平成四)年

一月七日

定例町史編集室内会議。一月業務予定検討。

一月一九日

第三回写真集編集小委員会開催。議題・写真集構成及びレイアウト関係について。

一月三〇日

任期満了に伴い町史編集委員（一六名）辞令書交付並びに第六回町史編集委員会開催。議題(1)町史編集委員長、副委員長選出。前回と同じく委員長當山哲男氏、副委員長西里喜行氏。(2)写真集編集の写真選択及び構成等の最終承認。

一月三〇日

図書寄贈。新琉球史外八冊、三木健氏（琉球新報編集局次長・竹富町史編集委員）。

二月一日

編纂資料収集及び写真撮影。（職員一名・竹富島日帰り）。

二月十日

写真集「ぱいぬしまじま」印刷製本入札。

二月一五日

行政文書分類整理編さん保存業務委託（南山舎代表上江洲儀

正）

二月一九日

図書購入。琉球歴史便覧外六冊蔵書。

二月二〇日

編集室内臨時会議。

三月四日

定例町史編集室内会議。三月業務予定検討。

## 編集後記

▼『竹富町史だより』第三号をお届けすることができました。今回は写真集『ぱいぬしまじま』が平成四年度に発刊することになり、多忙を極めることが予想されたため、早期に掲載項目を決め、取り組みを開始しました。聞き取りおよび資料調査は、写真集編集の合間をぬって行ないました。

▼竹富町史第十二巻資料編「戦争体験記録」の発刊に向けて前号で戦争体験記録の募集要領を載せましたが、町民の反応は芳しくありませんでした。戦争世代なら戦争体験があります。第十二巻発刊に向けてご協力をよろしくお願い致します。

▼編集スタイルは創刊号、第二号と変わりませんが今号に「地名あれこれ」をコラム風に盛り込みました。今後、様々な意見を取り入れ、編集に創意工夫を凝らします。(孝)



## 竹富町史だより 第3号

平成5年3月31日 発行

編集発行 竹富町史編集室

沖縄県石垣市字大川10番地

☎09808-2-9985

印 刷 八 島 印 刷